

レッグ編 *Lexilogus* に記される 閩南語音の表記と体系

吉川 雅之

目次

1. 緒言
2. ラテン文字表記
3. 閩南語音の体系
4. 結語

1. 緒言

小論は、19世紀最大のシノロジストであるジェームズ・レッグ（James Legge）がマラッカ在住期に著した『A lexilogus of the English, Malay, and Chinese languages: comprehending the vernacular idioms of the last in the Hok-keen and Canton dialects』（以下、本書と称す）に記される閩南語の表記法を分析し⁽¹⁾、その音韻体系を共時態的視点に立って俯瞰するものである⁽²⁾。1841年にマラッカの英華書院の印刷所で印刷された本書は、英語とマレー語、中文、閩南語、粵語の対照文例集であり、全文例とも中文は漢字のみで表記されているのに対し、閩南語と粵語はラテン文字のみで表記されている。

筆者が国立国会図書館所蔵本について行った調査では、本書の中文に使用されている漢字は延べ7216字であり、閩南語音を表すラテン文字表記は延べ1205文、8014音節に達する。これは、当時の閩南語の主要な特徴を把握する

に十分な情報量である。そして、閩南語のラテン文字では、粵語のラテン文字には付されていない、補助記号による声調の表示が行われている。また、本書に収められているのは文であるため、閩南語の口語形式が多く含まれていることが期待され、言語資料として他を以て代え難き価値を有する。文献の概要と粵語の音韻体系は吉川（2011）で既に明らかにされているが、閩南語についての先行研究は無く、本書に閩南語が記されていることすら従来知られていなかった⁽³⁾。

閩南語は、本書の序文では「Hok-keen vernacular」と記され、本文の天には「Hok-keen colloquial」と印刷されている。これが現代の中国語学で「閩南語」という学術名称を与えられる言語種を指していることは、小論で示すことになる漢字音から明らかである。閩南語は福建南部に分布する漢語系諸語の一種であり、言語系統としては俗に「福建語」とも称される閩語の一支系を成す。台湾で「鶴佬語」「河洛語」などと称される狭義の「台湾語」もこの閩南語に属する⁽⁴⁾。

19世紀を通じて、福建南部の閩南語を欧文で記した辞書や語学教材は十数点存在している。その多くは廈門方言に基づくものであるが、漳州方言を記したものも数点存在する。Douglas（1873）が漳州や泉州といった福建南部各地の形式を付記していることはよく知られているし、Schlegel（1886-90）も書名から漳州音を記していると推測される。但し、これらはいずれも19世紀後期のものである。本書の基礎方言も廈門方言ではないため⁽⁵⁾、19世紀前期の閩南語の地理的変種を解明する上でその存在価値は小さくない。本書の閩南語に対する考察は、音韻、語彙、文法のいずれを取り上げても意義を有する。

存在価値は言語体系内に限定されるものではない。小論では閩南語のラテン文字を漢字に転写するが、漢字により中文や粵語との対比が可能になることで、『Lexilogus』という書物の成立過程についての詳細を探ることが可能になる。筆者はそれを、当時の英華書院で行われていた翻訳がどのようなもので

あったかを把握することに繋がる、重要な課題であると考えている。

本書の序文には、閩南語についてはアメリカン・ボード外国伝道委員会 (American Board of Commissioners for Foreign Missions) の宣教師アビール (David Abeel, 1804-1846) と彼の閩南語教師であった一名の華人に、相当多くの箇所を手伝って貰ったことが記されている。この華人の名前と出身地は不明であるが、“Sew-Tsae” (秀才) と記されていることから⁽⁶⁾、福建南部出身の知識人で、アビールが東南アジアか澳門に在住していた時期に接触した者と推定される。

Wylie (1867: 72-74) によれば、アビールは 1804 年にニュージャージー州のニューブランズウィック (New Brunswick) に生まれている。アメリカ人宣教師であるブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman) に同道して 1830 年 2 月 25 日に澳門に到着。船員に教えを説く一方で、中国語の学習にも時間を割いた。その後、東南アジアに滞在するが、1832 年にアメリカン・ボード外国伝道委員会によってブリッジマンの後任に指名される。1833 年にイギリスへ、翌年にはアメリカへと移るが、1838 年 10 月 17 日にブラウン (Samuel Robbins Brown) 等と共にアメリカを出航、1839 年 2 月 20 日に澳門に到着し、2 年余りにわたり中国語学習のために滞在した。1842 年 2 月 2 日には澳門を去って香港経由で廈門の鼓浪嶼 (Koo-lang-seu) へと向かい、同 24 日に到着している。そして 1844 年 10 月 19 日まで廈門に定住した。

Griffis (1902: 87) は、より有益な教材を自らの手で用意すべく動き始めていたブラウンが、1841 年に夫人との 7 週間のシンガポール滞在中に、華人学生が英語を学ぶための新たな教材を作成していたことを記している。本書の粵語部分がそれであると考えられるため、母語話者による粵語文の口述とラテン文字による書き取り作業はこの 7 週間に行われたことになる。閩南語文の口述とラテン文字による書き取り作業もほぼ同時期に行われたに違いない。ブラウン夫妻の澳門からシンガポールへの渡航にはアビールが同行していたからであ

る。アビールは1841年4月末にシンガポールに到着しており、その後はマラッカで過ごした1ヶ月間を除き、9月まで滞在している（Williamson 1848: 204-205）。よって本書は遅くとも9月には口述・書き取りを終えていたと推測される。

2. ラテン文字表記

2.1 閩南語の表記法について

本書に記された閩南語音の体系を明らかにするためには、先ず用いられたラテン文字について各字母の表す音価を推定せねばならない。本書の序文には、「採用した表記法は大体ダイアの福建語の語彙集で使用されたものに合わせてあることがお分かりいただけるだろう」⁽⁷⁾と記されている。ダイアの語彙集とは、1838年にマラッカで刊行されたダイア（Samuel Dyer）の漳州方言語彙集『A vocabulary of the Hok-Këen dialect as spoken in the county of Tshëang-Tshew』のことである。ただし、筆者の調査ではダイアの表記法に従っていない点が幾つか確認された。このダイアの表記法は、メドハースト（Walter Henry Medhurst）が考案し、1832年刊行の閩南語辞典『A dictionary of the Hok-këèn dialect of the Chinese language』で使用した表記法に対して、若干の改定を加えたものである。メドハーストの表記法は、メドハースト自身がその辞典の序文（vii-viii）で述べているように、モリソン（Robert Morrison）が『A dictionary of the Chinese language』（1815-23年刊）で官話の表音に用いた表記法に手を加えて編み出したものであった⁽⁸⁾。

本書ではマレー語や粵語に対して設けられたような凡例が、閩南語に対しては設けられていない。そのため、Medhurst（1832）やDyer（1838）に記される表記法の説明に基づいて、各字母の記号表現と記号内容（即ち表記と推定音価）を示す必要が有る。Medhurst（1832）の表記法については洪（1993）や

杜（2011）が、Dyer（1838）の表記法については杜（2011）が、それぞれ既に推定音価を示している。また、張（2009:379-390）が掲げる付表にも Medhurst（1832）の漢字音に対する推定音価が記されている。しかし、それらは幾つかの字母について正確さを欠くものであるため、小論では筆者の推定音価を示し、相異点について論じることにする。また、後述するように、本書の表記は幾つかの字母について混乱を呈している。そして、混乱は声調を表す補助記号にも及んでいる。

なお、本書の表記法は、後にプロテスタント・ミッションの宣教師による更なる改定を経て、福建南部と台湾の教会で広く使用された。やがて「白話字」（教会ローマ字）と呼称されるようになるその表記法の（本書以後の）変遷については、村上（1968）で詳述されている。台湾では、白話字は現在でもプロテスタント・ミッションで使用されているのみならず、教会外でも閩南語の表記法として根強い支持を有している。そして、その使用はコンピュータ・ネットワーク上にも広がっている。Wikipedia には閩南語のページが設けられているが、使用されているのは白話字である。また、それ以外のウェブサイトでも閩南語の文字化のために白話字を用いたものは多い（吉川 2013b:27）。

前述のとおり、Dyer（1838）の表記法は Medhurst（1832）の表記法に若干の改定を加えたものである。ところが、Medhurst（1832）と Dyer（1838）はそもそも漢字音や語彙の形式で若干の違いを有している。両書の刊行年が数年を隔てるのみであることから、これらの違いの多くは閩南語内部の方言差が具現したものと考えてよい。

Medhurst（1832）の基礎方言について、洪（1993:49）と杜（2011:20）は共にダグラス（Carstairs Douglas）の『Chinese-English dictionary of the vernacular or spoken language of Amoy』（序 8 頁）での言及を引用し、漳州地区の中の漳浦であるとしている。Dyer（1838）の基礎方言については、杜（2011:104-105）が語彙特徴とダイアの経歴から判断して、ペナンとマラッカで話されていた漳

州方言であると断定している。この点については筆者も首肯する。Dyer (1838) はマラッカで刊行されているため、そこに記されているのはマレー半島で華僑により話されていた閩南語の一種であり、混雑を経たものである可能性が高い。しかし、中国の特定地点の方言を純粹に反映するものでないとは言っても、その主体は漳州方言であると判断して間違いない。

2.2 声母に関して——齒莖・後部齒莖音

本書には、s/*sを除くと齒莖・後部齒莖音声母を表す字母が3つ現れる。無声無気音のものと無声有気音のもの、そして有声音のものがそれぞれ1つずつである。字母の数に関して、本書と Medhurst (1832) や Dyer (1838) との間に違いは無い。

無声無気音のものと無声有気音のものを表すのに Medhurst (1832) では ch と ch'h が用いられた。Medhurst (1832) では ts や tsh という綴字は全く現れない。メドハーストは表記法の解説 (xxxiii) で、ch について「cheep に於ける頭子音 ch」, ch'h について「強い呼気を伴った ch であり、ch と母音との間にシューッと雑音を伴って発音される頭子音」と記している⁽⁹⁾。この説明から得られる推定音価は、後部齒莖を調音部位とする *tʃ と *tʃʰ である。洪 (1993) と杜 (2011) は共に齒莖音 *ts と *tsʰ を推定しているが、その根拠は何ら示されておらず、現代語の音価に無批判に従った嫌いが有る。

ところで、Dyer (1838) はこれを改定し、無声無気音のものに tsh, 無声有気音のものに c'h を用いている。ダイアは tsh について「nutshell という語で聞こえるような柔らかい tsh の音」, c'h について「church という語の硬い ch を表す。但し更にもっと強い呼気を伴う」と記しているため (Dyer 1838: A treatise on the tones of the Hok-keen dialect 5 頁)⁽¹⁰⁾、無声無気音については、この改定が音価の違いを動機としたものであることが窺える。音価の違いは Medhurst (1832) との間に存在した基礎方言の違いに由来するものであろう。

無声無気音に関して、Medhurst (1832) の基づいた方言では調音部位が後部歯茎であったのに対して、Dyer (1838) の基づいた方言では歯茎であった可能性が高い。よって、その音価は *ts と推定される。これに対して、無声有気音の調音部位は Medhurst (1832) のものと同じく、後部歯茎であったと考えられる⁽¹¹⁾。もし無声無気音に関して、Dyer (1838) の基づいた方言でも調音部位が後部歯茎であったのであれば、ダイアは tsh の説明にこそ「church」を用いたはずである。

本書では無声無気音のものは Dyer (1838) に従っているが、無声有気音のものは c'h から ch に改められている。p'h をはじめ他の有気音を表す字母に依然として含まれる要素「h」が現れなくなっているものの、これは調音部位の違いを表すものではないため、ch の音価は Dyer (1838) の c'h と同じと考えてよい。よって、推定音価は無声無気音が歯茎音 *ts, 無声無気音が後部歯茎音 *tʃ^h となる。資料間の違いをまとめると表 1 のようになる。

【表 1】無声歯茎・後部歯茎音声母についての小論の推定音価

	無声無気音	無声有気音
Medhurst (1832)	ch/*tʃ	ch'h/*tʃ ^h
Dyer (1838)	tsh/*ts	c'h/*tʃ ^h
本書	tsh/*ts (ch)	ch/*tʃ ^h

ところが、本書には、誤植により無声無気音を表すのにも ch が用いられた箇所が少なからず見られ、混乱を来している。表 1 で丸括弧内に示したものがそれである。レッグは序文で、tsh を ch と誤植した箇所が全体の約三分の一に及んでいることを詫言っているが⁽¹²⁾、三分の一という多さは、*ts を表すために ch を用いたことが偶発的なミスではなく、本書の成立過程が何らかの形で影響を及ぼした結果であると疑わしむるに足る⁽¹³⁾。筆者の調査では、本書で tsh を ch と誤植したと考えられる箇所として、例えば次のものが確認された。括弧内は出現例の数である。

誤	該当する漢字	正
chá (1 例)	早	tshá (4 例)
chay (11 例)	這	tsháy (35 例)
chě ⁿ à (9 例)	正【～好】	tshě ⁿ à (24 例)
chéy ^{ng} (1 例)	井	tshéy ^{ng} (0 例)
chin (4 例)	眞	tshin (4 例) ⁽¹⁴⁾
chóo (1 例)	主	tshóo (2 例)
chwâ (1 例)	蛇	tshwâ (0 例)

「這」や「正」の誤植数は、レッジが言う「三分の一」に近い数値を示している。これとは対照的に、ch を tsh と誤植したと考えられる箇所は少ない。

誤	該当する漢字	正
tshāyh (3 例) ⁽¹⁵⁾	冊	chēyh (5 例)
tshit (1 例)	七	chit (1 例)
tshöey (2 例)	疊	chöey (6 例)

さて、有声音のものを表すのに Medhurst (1832) では j が用いられた。メドハーストは表記法の解説 (xxxiii) で、j について「とても穏やかで、フランス語の j のような音、もしくは英語の pleasure, precision, crosier などの語の s の音に似ている」と記している⁽¹⁶⁾。この説明から得られる推定音価は、これまた後部歯茎が調音部位の有声摩擦音 *ʒ である。そして、英語の j を例えに用いていないことから、有声破擦音 *dʒ を推定すべきではないことは明らかである。杜 (2011:108) は歯茎を調音部位とした有声破擦音 *dz を推定しているが、その根拠は何ら示されておらず、現代語の音価に無批判に従った嫌いがある。

本書と Dyer (1838) は Medhurst (1832) と同じ字母 j を用いているが、いずれも説明を行っていない。そのため、本書でこの j が歯茎音を表すために用いられた可能性を完全に否定することはできないが、同時に歯茎音を表すため

に用いられたとする根拠も皆無である。よって、小論では Medhurst (1832) の j に同じく、有声後部歯茎摩擦音 *ʒ を推定する。

2.3 韻母に関して

本書の閩南語音を分析すると、韻母を表す字母についても、全てを Medhurst (1832) もしくは Dyer (1838) の表記法に従っているわけではないことが分かる。筆者の調査では、三書間で表記の違いが確認された韻母は 12 個に上る。それをまとめたものが表 2 である。各韻母の本書での推定音価は 3.2 にて示す。

【表 2】Medhurst (1832), Dyer (1838) と本書とで表記の異なる韻母

	①	②	③	④	⑤	⑥
Medhurst (1832)	ay	ai ^{ng}	ey	oe	ⁿ oe	eĕh
Dyer (1838)	ey [·] (er [·])	ey ^{ng}	ay	o [·]	o ^{ng}	ĕh
本書	ey	ey ^{ng}	ay	oe	(ⁿ oe)	ĕh ĕĕh

	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
Medhurst (1832)	it	ĕem/p	ĕung/k	ee ^{ng}	wu ^{ng}	e ^{ng}
Dyer (1838)	it	ĕum/p	ĕong/k	e ^{ng}	oo ^{ng}	u ^{ng}
本書	it id	ĕem/p ĕum/p	ĕung/k	e ^{ng}	oo ^{ng}	u ^{ng}

本書の表記は、④や⑨については Medhurst (1832) に従っているが、③や⑩については Dyer (1838) に従っている。そして、⑧については両書の表記が混在している。更に、⑦については両書に現れない形式 id が見られる。本書の序文で明言されている「大体ダイアの福建語の語彙集で使用されたものに合わせてある」は、確かに「大体」を冠するべきものと見なす必要が有ろう。これらの表記の違いが生じた一因を、筆者は基礎方言間の微細な音価の違いに求めることができると考えている。

以下に、表記の改定が行われなかった eng/k も含め、幾つかの韻母につい

て考察を行う。

2.3.1 韻母 ey と ay

Medhurst (1832) の表記法には非円唇前舌中段母音を表す字母が3つ現れる。ay, ey と斜体の *ay* がそれである。斜体の *ay* は Dyer (1838) と本書には現れないため、小論では考察の対象外とする。Medhurst (1832) の表記法の解説では、ay は「この語の a は care の a の音、もしくは bear, wear などの ea に似ている」⁽¹⁷⁾、ey は「(閩南語に) 特有な音で、時々 Ke-ay のように少し引き延ばして発音されるが、普通はフランス語の e のように短く発音される、或いはアルジェやチェニスの太守の称号に用いられる場合の dey や bey の ey のように発音される」⁽¹⁸⁾と記されている。この説明から得られる音価は、ay が *ɛ であり、ey が *e 乃至 *iɛ, *ei であろう。小論では *e を ey の推定音価とする。

Dyer (1838) の改定では、この字母 ay と ey が交替し、Medhurst (1832) の ay に対して ey', ey に対して ay が用いられている⁽¹⁹⁾。本書は Dyer (1838) の改定に従っているが、ey' のドットは省かれている。よって、本書での推定音価は ey が *ɛ, ay が *e となる。

Medhurst (1832) の韻母 ay に相対する鼻化韻 ai^{ng} も、Dyer (1838) では ey^{ng} に改められ、本書ではやはりドットが省かれた ey^{ng} が用いられている。よって、本書での推定音価は ey^{ng}/*ɛ̃ となる。また、入声韻についても Medhurst (1832) の äyh が Dyer (1838) で ěyh に改められ、本書はそれに従っている。よって、本書での推定音価は ěyh/*ɛʔ である。

2.3.2 韻母 eng/k

韻母 eng について、Dyer (1838) には何も述べられていないため、その音価は Medhurst (1832) のものと同じと考える。Medhurst (1832) の表記法の

解説では、eng は「lengthen の leng の韻。そして、依然として一音節なのだが、ke-eng のような音を出すために時々少し引き延ばされる」⁽²⁰⁾と記されている。この説明から得られる音価は、*eŋ 乃至 *ieŋ である。小論では *eŋ を推定音価とする。洪（1993:56）と杜（2011:109-110）は共に [eŋ ~ ieŋ] という音価を立てているが、Medhurst（1832）の基礎方言として有力視されている漳浦方言の現代音に無批判に従った嫌いが有る⁽²¹⁾。

韻母 eng に相対する入声韻 ek についても、Dyer（1838）には何も述べられていない。小論では ng/*ŋ と調音部位が同じ閉鎖音韻尾を持つ *ek を推定する。

2.3.3 韻母 oe と ⁿoe

Medhurst（1832）の表記法には円唇後舌中段母音を表す字母が2つ現れる。o と oe がそれぞれである。Medhurst（1832）の表記法の解説では、oe は「我等が英語の toe, そして hoe といった語の韻であるが、頬張った状態で発音される点が異なり、書くと ko-oo のようになる」⁽²²⁾と記されている。「頬張った状態で」という表現は、舌の口腔内での位置が後寄りでかつ低く、唇が丸まっていることを意図したものと考えられる。これに相応しい音価は円唇後舌半広母音 *ɔ̞ であろう。そして、「書くと ko-oo のようになる」の「oo」からは、韻尾の音価が *u であることが分かる。よって、小論ではこの韻母の音価を *ɔ̞u と推定する。ダイアは表記を o' に改めたが、本書は o' を用いず oe に戻している。

この韻母に相対する鼻化韻 *ɔ̞u は、Medhurst（1832）では ⁿoe であったが、Dyer（1838）では o^{ng} に改められた。本書には ⁿoe, o^{ng} いずれも現れないが、仮に現れていたならば Medhurst（1832）と同じ ⁿoe が用いられたと想像される。

2.3.4 韻母 uy と un/t

韻母 uy について、Dyer（1838）には何も述べられていないため、その音価は

Medhurst (1832) のものと同じと考える。Medhurst (1832) の表記法の解説では、uy は「英語の quiet という語の qui に似ている。或いは、依然として一音節なのだが、時々少し長く発音され、書くと Koo-wy のような感じになる」⁽²³⁾と記されている。この説明に基づいて、筆者は三重母音 *uəi を推定する。杜 (2011:109) は韻母 wae/*uai との混同を避けるために推定音価を [ui] としているが、英語の wy の音価は [wai] であるため、Koo-wy は [kuai] が相応しい。文献から得られる情報に基づいて音価を推定する限り、[ui] は再考の余地が有る。

韻母 un とそれに相対する入声韻 ut についても、同様である。Medhurst (1832) の表記法の解説では un は「Koo-un のような感じで発音され、一音節として発音される」⁽²⁴⁾と記されている。この説明に基づいて筆者は *uən を推定し、同様に ut に対しては *uət を推定する。杜 (2011:109) は韻母 wan/*uan との混同を避けるために推定音価を [un] としているが、英語の un の音価は [ʌn] であるため、Koo-un は [kuʌn] が相応しい。[un] は再考の余地が有る。

2.3.5 韻母 ëem/p

Dyer (1838) が改定した Medhurst (1832) の表記の一つに、韻母 ëem とそれに相対する入声韻 ëep が有る。Medhurst (1832) の表記法の解説では、ëem は「二重母音を含んでおり、書くと ke-yem のような感じで発音されるか、幾分 ke-yām のように発音される。key と them の短縮形 'em を使って、素早く一気に、つまり key-'em と発音するのをイメージしてもよいだろう」⁽²⁵⁾と記されている。この説明から得られる音価は、韻腹が前舌母音である *iæm 乃至は中舌母音である *iem である。

Dyer (1838) は ëem を ëum に改定した。その理由は述べられていないが、基礎方言では韻腹が後舌母音であったために e を嫌い、u を選んだことが考えられる。その推定音価は *iem 乃至は *iʌm である。その根拠として、ダイアが ëen については改定を行っていないことを指摘しておきたい。韻尾の調音

部位のみが異なる韻母 *ëen* について、Medhurst (1832) の表記法の解説では *Ke-en* や *Ke-yen*, *Ke-än* といった説明がなされており、韻腹が前舌母音であったことが窺える。ところが、ダイアはこの *ëen* については改定を行っていないのである。韻尾が歯茎音であった *ëen* は韻腹が前舌母音であり、韻尾が両唇音であった *ëem* は韻腹が後舌母音であった。ダイアは *ëem* では避けられない表記法と発音のずれを、韻腹を表す字母を改めることで解決しようとしたのではなかろうか。

本書には *ëem* と *ëum* の両方が現れる。声母との結合関係で両者は異なり、*ëem* には制限が見られない（但し *t'h* と結合した例は見当たらない）のに対し、*ëum* は *t*, *t'h* との結合のみが確認された。この事実は、本書の基礎方言では、同一の韻母 */iam/* が歯茎破裂音声母 **t*, **tʰ* と結合する場合とそれ以外の声母と結合する場合とで、韻腹の音価を異にした可能性を示唆している。*e* は前舌母音を表し、*u* は後舌母音を表したと考えられるため、歯茎音声母 **t*, **tʰ* と結合する場合は、韻腹が後舌母音になる傾向が有ったと筆者は考えている。なお、小論では推定音価を一律に **iæm* で記すことにする。

【表3】 韻母 */iam/* と */ian/* の表記と推定音価

	韻尾 m	韻尾 n
Medhurst (1832)	<i>ëem</i> /* <i>iæm</i> ~ <i>iəm</i>	<i>ëen</i> /* <i>iæn</i>
Dyer (1838)	<i>ëum</i> /* <i>iəm</i> ~ <i>iɒm</i>	<i>ëen</i> /* <i>iæn</i>
本書	<i>ëem</i> /* <i>iæm</i> (<i>t'h</i> - 以外) <i>ëum</i> /* <i>iɒm</i> (<i>t</i> , <i>t'h</i> -)	<i>ëen</i> /* <i>iæn</i>

韻母 *ëem* に相対する入声韻 *ëep* についても、本書には2つの形式 *ëep* と *ëup* が現れる。やはり声母との結合関係で両者は異なり、*ëep* には制限が見られない（但し *t* と結合した例は見当たらない）のに対し、*ëup* は *t* との結合のみが確認された。これは韻母 */iam/* と軌を一にする現象であり、歯茎破裂音声母と結合する場合は、韻腹が後舌母音になる傾向が有ったと考えられる。小論では推定音価を一律に **iæp* で記すことにする。

2.3.6 韻母 *ëung*/k

Medhurst (1832) の表記法の解説では、*ëung* は「young と押韻する音であるが、書くと *këong* のように発音する人々もあり、*song* と押韻させられる」⁽²⁶⁾ と記されている。この説明は、*ëung* で表記される漢字を *i_Λŋ と発音する話者と、*i_ɔŋ と発音する話者が当時存在したことを表している。両者の違いは韻腹を担う母音の円唇性の有無に尽きる。そして、非円唇母音である前者の韻腹 *_Λ は、韻頭 *i による同化と考えられるので、*i_Λŋ は /i_ɔŋ/ と音韻解釈することが可能である。

Dyer (1838) は *ëung* を *ëong* に改定した。その理由は述べられていないが、基礎方言では韻腹が円唇母音であったために *u* を嫌い、*o* を選んだ可能性が有る。そして、本書は *ëong* を用いず、*ëung* に戻している。筆者は、本書の基礎方言では韻腹を担う母音の唇の丸めが弱かったために、アビールかレグが *o* を嫌い、*u* を選んだと考えている。よって、音価に *i_ɔŋ を推定する（*ɔ* の下に付した _ɔ は唇の丸めが弱いことを表す）。

韻母 *ëung* に相対する入声韻 *ëuk* についても、小論では ng/*ŋ と調音部位が同じ閉鎖音韻尾を持つ *i_ɔk を推定する。

2.3.7 韻母 *it*

本書では韻母 *it* に表記上の異体 *id* が現れる。これは Medhurst (1832), Dyer (1838) いずれにも現れない形式である。指示詞 *tshid*（及び *chid*）と *hid* でのみ現れており、かつ *tshit*（及び *chit*）と *hit* という表記は現れない。そして、これらの指示詞は後続音節が *la*/**la*, *ay*/**e* のいずれかとなっている。後続音節の最初の音的要素がいずれも共鳴音（sonorant）であるため、その入渡りが指示詞の韻尾 **t* の出渡りと重なることで、**t* が有声音の聴覚印象を得たことが *id* で記された原因として考えられるが、憶測の域を出ない。

2.4 声調に関して

典型的な閩南語は7つの調類を有するが、Medhurst (1832) は母音を表す字母の上に補助記号を付すことでそれらを表した。但し、3.3 で示すとおり、小論で「陰平」「陰入」と称する2つの調類では補助記号を付さない、即ち無標である。

Dyer (1838) と本書は、声調に関しては Medhurst (1832) のものを全面的に踏襲している。しかし、本書では調類を表す補助記号に関して、誤植に因る若干の混乱が認められる。誤植は、(1) 体系的なもの、(2) 補助記号の単なる欠落に因るもの、(3) その他、の3種類に分けることができる。ここでは体系的なものについて述べることにし、補助記号の単なる欠落については2.5 で述べ、その他については機会を改めて述べることにする。

体系的な誤植としては、垂直線 (') の付加が挙げられる。閉鎖音韻尾を有する韻母にのみ現れる2つの調類(「陰入」と「陽入」)は、「陰入」が補助記号無しで、「陽入」が垂直線で表される。ところが、レッグは序文で「böëyh に対して誤って böëyh を用いた」ことに触れている。筆者の調査では、誤った形式が29例確認された。これは正しい形式の18例を上回っている。

誤	該当する漢字	正
böëyh (29例) ⁽²⁷⁾	<u>欲</u>	böëyh (18例)

2.5 で述べるように、補助記号を付加したことに因る誤植は、ブリーブを付加したものが若干数見られるのを除き、本書では少ない⁽²⁸⁾。「欲」böëyh で垂直線を付加するという誤植が大量に生じている事実、本書の成立過程が何らかの形で影響を及ぼした結果であると疑わしむるものである。

2.5 誤植について

本書では、所々で表音に誤植が見られる。但し、その多くは漢字への転写や

文意の把握を困難にする程のものではない。本書に見られる誤植は、(1) 誤植が発生した文字・記号の別、(2) 誤植の類型、に従って表 4 のように分類することができる。欄内の + は該当する誤植が数例のみ見られること、++ は若干数 (10 例以上) 見られることを表す。x は任意の母音字を表す。

【表 4】誤植が発生した文字・記号の別と誤植の類型の関係

文字・ 記号 類型	字母	補助記号		
		アポストロフィー	トレマ, ブリーブ	調類記号
欠落	+ (xh)	++	++ (˘)	++ (ˊ)
取り違え	++ (tsh と ch) + (その他)		+	++
位置の誤り	+ (x ^h , x ^{ng})	++		
付加			++ (˘)	++ (ˊ)

字母に関する誤植は次のとおりである。欠落としては、声門閉鎖音韻尾 *ʔ を表す h が欠落したものが数例見られる。例えば、23 頁 2 行目に見える böëy 「欲」がそれである（正しくは böëyh）。取り違えは、ch を tʰsh と誤植したものが 1 例見られる。19 頁 16 行目の tʰshap 「插」がそれである（正しくは chap）。また、b を h と誤植したものが数例見られるが、植字の過程で手書きの草稿の文字を誤認したことによる、典型的な誤植であったと推測される。15 頁 8 行目に見える hô 「無」はその一例である（正しくは bô）。位置の誤りは、数例ではあるが鼻化母音を表す ng や声門閉鎖音韻尾を表す h の上下位置を誤ったものが見られる。例えば、79 頁 19 行目に見える yëöng 「様」、73 頁 9 行目に見える tshë^h 「折」がそれである（正しくはそれぞれ yëö^{ng} と tshë^h）。字母の付加は殆ど見られなかった。

有気音を表すアポストロフィー (ˊ) に関する誤植は次のとおりである。欠落や、前後位置の誤りが若干数見られる。次の括弧内の形式がそれである。pʰ (ph), tʰ (th), kʰ (kh, khˊ)。これに対して、付加は殆ど見られない。19 頁 20 行目に見える tʰshān 「贊」はその稀少な例である（正しくは tshān）。

トレマ (¨) やブリーブ (ˇ) に関する誤植は次のとおりである。トレマの欠落は若干数見られる。9 頁 15 行目に見える *teôh*「著」がその一例である（正しくは *tëôh*）。これに対して、ブリーブの欠落は 1 例のみである。79 頁 7 行目の *tëoh*「著」がそれである（正しくは *tëôh*）。取り違えは、後半に 10 例ほどが見られる。例えば、79 頁 19 行目に見える *tshô^a*「怎」は、トレマをマクロンと取り違えたものである（正しくは *tshö^a*）。*b* を *h* と誤植したものと同じく、植字の過程で手書きの草稿の文字を誤認したことによる、典型的な誤植であろう。付加は、ブリーブについて若干数見られる。これは本書の特徴と言ってよい。専ら *p*, *t*, *k* が韻尾を担う入声韻で起きており、105 頁 14 行目に見える *tôk*「獨」はその一例である（正しくは *tók*）。Medhurst (1832) の表記法では、ブリーブは声門閉鎖音韻尾 *h*/*? が韻尾を担う韻母でのみ使用されている。それが *h* 韻尾以外の入声韻にまで拡張して使用されていることは、アビールかレッグが韻尾の調音部位の如何を問わず調音時間が短いことを表すためにブリーブを用いようとしたことを窺わせる。

調類を表す補助記号に関する誤植は次のとおりである。欠落は、陽入を表す垂直線 (ˊ) の欠落が若干数見られる。この現象は、2.4 で述べた現象と相俟って、陰入と陽入の混乱を招いている。一部分を挙げると次のとおりである。

誤	該当する漢字	正
<i>bak</i> (1 例)	目	<i>bák</i> (8 例)
<i>jip</i> (4 例)	入	<i>jíp</i> (2 例)
<i>lat</i> (4 例)	力	<i>lát</i> (5 例)
<i>pek</i> (1 例)	別	<i>pék</i> (2 例)
<i>sit</i> (6 例)	實	<i>sít</i> (1 例)
<i>tok</i> (7 例)	獨	<i>tók</i> (14 例) ⁽²⁹⁾
<i>t'hăyh</i> (1 例)	提	<i>t'hâyh</i> (34 例)
<i>tshap</i> (3 例)	十	<i>tsháp</i> (11 例)

tshit (42 例)⁽³⁰⁾

二

tshit (19 例)

の中で「入」「實」「二」は正しい形式よりも誤った形式の出現度が高い。これらについては、2.4 で述べた「欲」と同じく、補助記号の単なる欠落ではない可能性が有る。

3. 閩南語音の体系

3.1 声母 (零声母を含む)

p/*p	pʰ/*pʰ	b/*b	m/*m	
飛保飯跋	蜂品鼻曝	無買聞目	毛問物	
t/*t	tʰ/*tʰ		n/*n	l/*l
豬點大桌	蟲土探讀		年卵讓	能禮內落
tsh/*ts	ch/*tʰ	j/*ʒ		s/*s
蕉水像石	車手盡出	人擾字熱		西小尚色
k/*k	kʰ/*kʰ	g/*g	gn/*ŋ	h/*h
枝貴近骨	骹齒臼確	牙五外月	午	花雨現法
／*∅				
紅有愛越				

説明：

- ①他言語からの借用語にのみ現れる c/*k, f/*f は除外する。
- ② 2.2 で述べたとおり、無声無気歯茎破擦音声母 *ts を表すために少なからざる箇所では ch も用いられており、混乱が生じている。
- ③ gn は gnóe 「偶」、gnōe 「午」、gnēy^{ng} 「硬」の 3 音節のみで現れる。

3.2 韻母 (成節的子音 *m と *ŋ を含む)

a/*a	ae/*ai	aou/*au	am/*am	an/*an	ang/*aŋ
昨家【～己】	拜知	臭交	藍暗	慢千	板同

レッグ編 *Lexilogus* に記される閩南語音の表記と体系

ey/*ɛ	ay/*e				
茶價	下【放～】會				
e/*i		ew/*iu	im/*im	in/*in	eng/*eŋ
時齒		流手	任金	剩因	等從
o/*o		oe/*ɔu			ong/*ɔŋ
河倒		圖雨			爽風
oo/*u	uy/*uəi			un/*uən	
思府	醉回			尊份	
ëa/*ia		ëaou/*iau	ëem/*iæm (ëum)	ëen/*iæn	ëang/*iaŋ
寫騎		猫曉	針店	遍緣	雙兩【～軍】
ëo/*io					ëung/*iɔŋ
燒叫					中【其～】用
wa/*ua	wae/*uai			wan/*uan	
娶外	怪			專緩	
öey/*ue					
火未【～好】					
ⁿ a/*ā	ae ^{ng} /*āi				
三打	𠵿				
ey ^{ng} /*ĕ					
罵性					
e ^{ng} /*ĩ					
變添					
ë ⁿ a/*iā					
行【～路】痛					
ëo ^{ng} /*iō					
娘上【～岸】					
ö ⁿ a/*uā					
關晏	ooi ^{ng} /*uĩ				
	問昏				
āh/*aʔ		aōuh/*auʔ	ap/*ap	at/*at	ak/*ak
拍六		落【拍加～】	十合	力結【活～】	木確
ëyh/*ɛʔ	āyh/*eʔ				
拔册	節狹				
ëh/*iʔ (ëĕh)			ip/*ip	it/*it (id)	ek/*ek
碟蝕			入	一式	即熟

ðh/*o?			ok/*ɔk
桌落【～去】			獨各
		ut/*uət	
		律出	
ëäh/*ia?	ëep/*iæp (ëup)	ëet/*iæt	ëak/*iak
掠隻	粒帖	別吉	約
ëöh/*io?			ëuk/*iɔk
石著【唔～】			足
wāh/*ua?		wat/*uat	
熱闊		發越	
öëyh/*ue?			
月			
ë ^{ng} h/*i?			
物	u ^m /*ɱ		u ^{ng} /*ŋ
	唔【不】		堂損

説明：

①調類記号の有無・違いを捨象した場合，表記上の異体として，次の括弧内の形式が現れる。ew (yew), im (yim), in (yin), uy (wuy), un (wun), ëa (yëa), ëaou (yaou), ëem (yëem), ëen (yëen), ëo (yëo), ëung (yung), ëⁿa (yëⁿa), ëo^{ng} (yëo^{ng}), ooi^{ng} (wooⁱng), it (yit), ut (wut), ëäh (yëäh), ëak (yëak), ëöh (yëöh)。これらは Medhurst (1832) の表記法ではゼロ声母（音節頭子音無し）の音節を表すために用いられており，本書でも用いられ方は同じである。

②2.3 で述べたように，ëh に対して ëëh が，it に対して id が，ëem と ëep に対して ëum と ëup が，それぞれ現れている。

③鼻音声母 *m, *n, *ŋ と結合した非鼻化母音の韻母 (*a, *o? など) は，声母の影響で ma [mā] や noh [nō?] のように鼻母音化していた可能性が有るが，小論ではその可能性を問わず，音価を記すに当たって鼻母音化の処理は行わない。

3.3 声調

声調に関しては、本書の表記法は Medhurst (1832) や Dyer (1838) のものと全く同じである。調類は母音字の上に補助記号を付すことで表される。但し、陰平と陰入では付さない。ブリーブは調音時間が短いことを表すために付されており、陰入と陽入（共に声門閉鎖音 h/*ʔ が韻尾を担う韻母のみ）で現れるが、声調を表すものではない。以下に調類番号、調類名、代表字、*a を韻腹とする韻母の表音例、の順で示す。「1」から「8」までの調類番号（6 は欠番）は Dyer (1838) で用いられているものに従った。「陰平」から「陽入」までの調類名は筆者が与えたものであり、本書には記されていない。

- 1 （陰平） 雞心邊鐘 a, ang
- 2 （上声） 寫了緊等 á, áng
- 3 （陰去） 去照片痛 à, àng
- 4 （陰入） 法出確的 āh, ak
- 5 （陽平） 茶錢銀暝 â, âng
- 7 （陽去） 鼻有讓靜 ā, āng
- 8 （陽入） 罰落額熟 āh, ak

調類体系は本書と Dyer (1838) とで一致しているが、小論では調値の推定は行わない。これは、Dyer (1838:7) に示される五線譜を用いた記述に従って調値を与えることは可能であるものの、基礎方言が本書と Dyer (1838) とで異なる可能性が高いことに因る。

なお、軽声を表す補助記号は見当たらなかったが、現象としての軽声は存在し、調類記号が付されない陰平や陰入に紛れている可能性が有る。

3.4 音節表

声母と韻母の結合関係は以下のとおりである。韻母は舒声韻とそれに相対す

る入声韻を対として排列した。但し、*ai のように相対する入声韻が確認できなかったものはこの限りではない。舒声韻とは閉鎖音以外の音が韻尾を担う韻母であり（ゼロ韻尾も含む）、入声韻とは閉鎖音（p, t, k, ?）が韻尾を担う韻母である。調類との結合関係では、舒声韻は 1, 2, 3, 5, 7 と、入声韻は 4, 8 とのみ結合する。欄内の漢字の右上に付記した調類番号がそれである。空欄は本書に該当する表記が現れないことを意味する。

必要と判断したものについては説明を加え、【 】内には本書での語義や用法を注記した。語義については 19 世紀の西洋人の手に成る閩南語資料を参考にした箇所が有る。用法の～は当該漢字を表す。同義でありながら相異なる複数の音形が確認されたものについては、又音（表記 / 推定音価）を記したが、調類記号のみが異なるものは、連読変調を経た形式を誤認したことに因るものである可能性も有るため、記していない。

レッグ編 *Lexilogus* に記される閩南語音の表記と体系

	a/*a	āh/*aʔ	ae/*ai	aou/*au	aōuh/*auʔ
p/*p p'h/*pʰ b/*b m/*m	飽 ² 馬 ²	 拍 ⁴ 肉 ⁴	拜 ³	 貌 ⁷	
t/*t t'h/*tʰ n/*n l/*l	焦 ¹ 若 ⁷ 埕 ⁵	 拉 ⁸	事 ⁷ 太 ³ 來 ⁵	□ ¹ 頭 ⁵ 撓 ² 樓 ⁵	 落 ⁸
tsh/*ts ch/*tʃʰ j/*ʒ s/*s	早 ² 差 ¹	閨 ⁸	才 ⁵ 彩 ² 使 ²	走 ² 草 ² 哋 ² 掃 ³	
k/*k k'h/*kʰ g/*g gn/*ŋ h/*h	教 ³ 骹 ¹	呷 ⁴ 較 ⁴	該 ¹ 害 ³	到 ³ 口 ² 賢 ⁵ 候 ⁷	
_/*Ø	仔 ²		愛 ³	後 ⁷	

説明：焦【乾】。骹【脚】。仔【誰～：誰】。呷【嗎六～：馬六甲】。較【～好
前日：好於先時】。事【～先：以前】。害 hāi/*hai⁷ の誤認である可能性が有る。
□ (taou) 【此 (tshé) ～：這裡】，この音節は軽声である可能性が有る。哋【～
嘩人：Javanese】。賢【能幹】。落【拍加～：散】。

	am/*am	ap/*ap	an/*an	at/*at	ang/*aŋ	ak/*ak
p/*p p'h/*pʰ b/*b m/*m			反 ² 萬 ⁷	別 ⁸ 識 ⁴	房 ⁵ 蜂 ¹ 蠓 ² 芒 ¹	縛 ⁸ 曝 ⁴ 目 ⁸
t/*t t'h/*tʰ n/*n l/*l	濕 ⁵ 探 ³ 藍 ⁵		豐 ⁵ 趁 ³ 咱 ²	值 ⁸ 塞 ⁴ 力 ⁸	同 ⁵ 蟲 ⁵ 人 ⁵	逐 ⁸ 讀 ⁸
tsh/*ts ch/*tʃʰ j/*ʒ s/*s	摻 ¹ □ ⁵	十 ⁸	贊 ⁷ 千 ¹ 先 ¹		櫟 ⁵	
k/*k k'h/*kʰ g/*g gn/*ŋ h/*h _/*∅	柑 ¹ 慙 ⁷ 暗 ³	合 ⁴ 合 ⁴	揀 ² 肯 ² 漠 ³ 閑 ⁵	結 ⁴	工 ¹ 空 ¹ 項 ⁷ 紅 ⁵	□ ⁴ 確 ⁴

説明：□ (sâm) 【□ (lâm) ～：胡亂】。合 (kap) 【與】。合 (háp) 【～伙】。
結【活～】。蠓【～蟲：蚊子】。櫟【樑】。曝【晒】。□ (kak) 【□ (k'hěöh) ～：
丟】。

又音：閑 êng/*eŋ⁵。櫟 chang (tshang/*tsaŋ¹ の誤植である可能性が高い)。
讀 tok (tòk/*tòk⁸ の誤植である可能性が高い)。

レッグ編 *Lexilogus* に記される閩南語音の表記と体系

	ey/*ɛ	ěyh/*ɛʔ	ay/*e	ăyh/*eʔ	e/*i	ěh/*iʔ	ew/*iu
p/*p p'h/*pʰ b/*b m/*m	爸 ⁷ 馬 ²	拔 ⁸	批 ¹ 賣 ⁷		被 ⁷ 薇 ⁵		
t/*t t'h/*tʰ n/*n l/*l	茶 ⁵ 退 ³ □ ⁵ □ ¹		地 ⁷ 提 ⁸ 禮 ²		豬 ¹ 剃 ³ 理 ²	鐵 ⁴	稻 ⁷ 留 ⁵
tsh/*ts ch/*tʃʰ j/*ʒ s/*s	債 ³ 冊 ⁴ 所 ²		坐 ⁷ 詐 ³ 細 ³	節 ⁴	志 ³ 鼠 ² 字 ⁷ 匙 ⁵	折 ⁸ 蝕 ⁴	就 ⁷ 手 ² 柔 ⁵ 修 ¹
k/*k k'h/*kʰ g/*g gn/*ŋ h/*h _/*∅	街 ¹ 牙 ⁵ 係 ⁷ 啞 ²	隔 ⁴ 客 ⁴	雞 ¹ 下 ⁷ 會 ⁷		枝 ¹ 去 ³ 疑 ⁵ 耳 ⁷ 意 ³		球 ⁵ 幼 ³

説明：□ (nêy) 【□ (an) ～：如此】。□ (ley) 【～□ (long)：投買】。詐 tshàh/*tse³ の誤植である可能性が高い。下 【放～】。

又音：所 sáy/*se², só/*so²。冊 tshăyh (chěyh/*tʃʰɛʔ⁴ の誤植)。

	im/*im	ip/*ip	in/*in	it/*it	eng/*eŋ	ek/*ek
p/*p p'h/*p ^h b/*b m/*m			品 ² 面 ⁷ 明 ⁵	必 ⁴ 疋 ⁴	並 ⁷ 明 ⁵	白 ⁸
t/*t t'h/*t ^h n/*n l/*l		立 ⁸		得 ⁴ 迨 ⁴	重 ⁷ 能 ⁵	的 ⁴ 勒 ⁴
tsh/*ts ch/*tʃ ^h j/*ʒ s/*s	深 ¹ 忍 ² 心 ¹	入 ⁸	眞 ¹ 親 ¹ 認 ⁷ 信 ³	職 ⁴ 七 ⁴ 日 ⁸ 實 ⁸	整 ² 銃 ³ 生 ¹	跡 ⁴ □ ⁴ 熟 ⁸
k/*k k'h/*k ^h g/*g gn/*ŋ h/*h	今 ¹ □ ⁷ 熊 ⁵		近 ⁷ 輕 ¹ 銀 ⁵	吮 ⁴	經 ¹	□ ⁴ 刻 ⁴ 逆 ⁸ 或 ⁴
⏟/*∅	音 ¹		因 ¹	憶 ⁴	永 ²	益 ⁴

説明：今【現～】。□(gīm)【提】。迨【～迨(t'hô)：玩兒】。吮【嘸～人：Bugis】。明【～白】。重【～倍：雙倍】。生【醫～】。□(jĕk)【追趕】。□(kek)【更】。

レッグ編 *Lexilogus* に記される閩南語音の表記と体系

	o/*o	ǝh/*oʔ	oe/*ɔu	ong/*ɔŋ	ok/*ɔk	oo/*u
p/*p	保 ²	薄 ⁴	步 ⁷		僕 ⁸	布 ³
p'h/*pʰ	抱 ⁷					
b/*b	無 ⁵	莫 ⁸	妻 ²	摸 ¹		嗎 ¹
m/*m	毛 ⁵					
t/*t	都 ¹	桌 ⁴	圖 ⁵	擋 ³	獨 ⁸	剛 ⁷
t'h/*tʰ	妥 ²		土 ²	通 ¹	託 ⁴	
n/*n	兩 ⁷	□ ⁴				
l/*l	惱 ²	落 ⁸	路 ⁷	攏 ²		
tsh/*ts	做 ³	射 ⁸	粗 ¹	總 ²		自 ⁷
ch/*tʃʰ	□ ⁵			創 ³	錯 ⁴	厝 ³
j/*ʒ						
s/*s	鎖 ²	索 ⁴				事 ⁷
k/*k	過 ³	再 ⁴	顧 ³	講 ²	國 ⁴	久 ²
k'h/*kʰ	可 ²		苦 ²			臼 ⁷
g/*g	□ ⁵		五 ⁷			牛 ⁵
gn/*ŋ			偶 ²			
h/*h	好 ²		雨 ²	方 ¹	覆 ⁴	婦 ⁷
_/*Ø		惡 ⁴	烏 ¹	鳳 ¹		有 ⁷

説明：都【～是】。□ (chò) 【～□ (poô)：全部】，tshò/*tso³の誤植である可能性が有る。□ (gô)【刺】。好【～人】。□ (nǝh)【衫～：衣服】。落【～去】。粗 choe/*tʃʰɔu¹の誤植である可能性が有る。嗎【～嚟由話：馬來語】。剛【～～：剛剛】。厝【家】。

	uy/*uəi	un/*uən	ut/*uət	ěa/*ia	ěäh/*ia?	ěaou/*iau
p/*p p'h/*p ^h b/*b m/*m	肥 ⁵	本 ² 奔 ¹ 文 ⁵	不 ⁴		壁 ⁴	表 ²
t/*t t'h/*t ^h n/*n l/*l	對 ³	轉 ² 吞 ¹ 忍 ²	 律 ⁸		 掠 ⁸	條 ⁵ 堂 ⁷ 猫 ¹ 了 ²
tsh/*ts ch/*tʃ ^h j/*ʒ s/*s	水 ² 喙 ³ 隨 ⁵	船 ⁵ 伸 ¹ 率 ⁴	 出 ⁴ 率 ⁴	□ ¹ 車 ¹ 寫 ²	食 ⁸ 削 ⁴	照 ³ 齊 ⁵ 擾 ² 數 ³
k/*k k'h/*k ^h g/*g gn/*ŋ h/*h	貴 ³ 開 ¹ 費 ³	軍 ¹ 睏 ³ 恨 ⁷	骨 ⁴ 核 ⁸	寄 ³ 倚 ⁷ 額 ⁸	□ ⁸ □ ⁴	攪 ² 蹺 ¹ 曉 ²
_/*Ø	為 ⁷	溫 ¹		厭 ³	□ ⁸	魷 ¹

説明：喙【～鬚：鬍子】。□ (tshěa)【這裡】。倚【站】。□ (kěäh)【舉，揭】。
 □ (hěäh)【那麼】。□ (yěäh)【尾～：胡蝶】。堂【～～：常常】。齊
 tshěaou/*tsiau⁵の誤植である可能性が有る。數【算～】。

レッグ編 *Lexilogus* に記される閩南語音の表記と体系

	ëem/*iæm (ëum)	ëep/*iæp (ëup)	ëen/*iæn	ëet/*iæt	ëang/*ian	ëak/*iak
p/*p p'h/*pʰ b/*b m/*m			便 ⁷ 片 ³ 面 ⁷	別 ⁴		
t/*t t'h/*tʰ n/*n l/*l	點 ² □ ²	□ ⁴ 疊 ⁸ 粒 ⁸	天 ¹ 槌 ¹		□ ⁷ 兩 ²	
tsh/*ts ch/*tʃ j/*ʒ s/*s	暫 ⁷ 針 ¹ 閃 ²	捷 ⁸ 捷 ⁸	戰 ³ 然 ⁵ 先 ¹	節 ⁴ 切 ⁴	將 ¹ 將 ¹ 嚷 ² 雙 ¹	
k/*k k'h/*kʰ g/*g gn/*ŋ h/*h	鹹 ⁵ 欠 ³	壞 ⁴		結 ⁴		
_/*∅	鹽 ⁵		緣 ⁵			約 ⁴

説明：□ (t'hëúm) 【～□ (tsháe)：或者】。□ (tëup) 【～仔：一點兒】。捷 (chëëp) tshëëp/*ts iæp⁸ の誤植である可能性が高い。便 【隨～】。先 【首先】。結 【～子：結果實】。□ (tëāng) 【託～：託付】。將 cheang (tshëang/*tsian¹ の誤植である可能性が高い)。

	ëo/*io	ëöh/*io?	ëung/*içŋ	ëuk/*içk	wa/*ua	wäh/*ua?
p/*p p'h/*p ^h b/*b m/*m	廟 ⁷				破 ³ 磨 ⁵	跋 ⁸
t/*t t'h/*t ^h n/*n l/*l		著 ⁸	中 ¹		大 ⁷	
tsh/*ts ch/*tʃ ^h j/*ʒ s/*s	少 ² 笑 ³	借 ⁴	眾 ³	足 ⁴	紙 ² 娶 ⁷	□ ⁴
k/*k k'h/*k ^h g/*g gn/*ŋ h/*h	叫 ³	拿 ⁴		仍 ² 玉 ⁸ 屬 ⁸	徙 ²	熱 ⁸ 煞 ⁴
_/*θ	搖 ⁵	藥 ⁸	□ ¹		寡 ² 掛 ³ 我 ²	割 ⁴ 闊 ⁴
			用 ⁷		話 ⁷	活 ⁸

説明：少【多 (tshāy) ～】。相【～同】。著【唔～：不對】。中【～國】。□ (hëung) 【□ (sòng) ～：貧窮】。大【～聲】。幾【～多 (tshāy)】。□ (tshwäh) 【□ (ka) ～：蟑螂】。

又音：少 chëó (tshëó/*tsio² の誤植である可能性が有る)。略 lëo (lëöh/*lio?⁸ の誤植である可能性が有る)。

レッグ編 *Lexilogus* に記される閩南語音の表記と体系

	wae/*uai	wan/*uan	wat/*uat	öey/*ue	öëyh/*ue?	ⁿ a/*ã
p/*p pʰ/*pʰ b/*b m/*m				倍 ⁷ 尾 ²	欲 ⁴	
t/*t tʰ/*tʰ n/*n l/*l						打 ²
tsh/*ts ch/*tʃʰ j/*ʒ s/*s		專 ¹		罪 ⁷ 罣 ⁷ 稅 ³		三 ¹
k/*k kʰ/*kʰ g/*g gn/*ŋ h/*h	楞 ² 快 ³	關 ¹ 款 ² 原 ⁵ 煩 ⁵		菓 ² 課 ³ 歲 ³	月 ⁸ 血 ⁴	敢 ²
_/*Ø		怨 ³	越 ⁸			

説明：關【無～】。

又音：尋 tshöëy (chöëy の誤植である可能性が有る)。

	ae ^{ng} /*āi	ey ^{ng} /*ɛ	e ^{ng} /*i	ě ^{ng} h/*iʔ	ě ⁿ a/*iā	ěo ^{ng} /*iō
p/*p pʰ/*pʰ b/*b m/*m	𪛗 ²	病 ⁷ 嗅 ⁵	邊 ¹ 鼻 ⁷	物 ⁸	名 ⁵	
t/*t tʰ/*tʰ n/*n l/*l		撐 ³	滇 ⁷ 添 ¹ 年 ⁵		碇 ⁷ 痛 ³ 領 ²	讓 ⁷
tsh/*ts ch/*tʃʰ j/*ʒ s/*s		□ ² 醒 ² 生 ¹	錢 ²		正 ³ 且 ² 聲 ¹	像 ⁷ 上 ⁷ 想 ⁷
k/*k kʰ/*kʰ g/*g gn/*ŋ h/*h		硬 ⁷	見 ³		件 ⁷ 兄 ¹	
∅/*∅					羸 ⁵	羊 ⁵

説明：嗅【昨～】。□ (tshéy^{ng}) 【美麗】。生【先～】。滇【(水) 満】。正【～好】。上【～岸】。

又音：正 chěⁿà (tshěⁿà/*tsiā³ の誤植である可能性が高い)。上 tshěō^{ng}/*tsiō⁷。

レッグ編 *Lexilogus* に記される閩南語音の表記と体系

	ö ⁿ a/*uā	ooi ^{ng} /*uī	u ^m /*m̥	u ^{ng} /*ŋ̊
p/*p p'h/*p ^h b/*b m/*m	半 ³ 破 ³	飯 ⁷ 門 ⁵		
t/*t t'h/*t ^h n/*n l/*l	單 ¹ 爛 ⁷	轉 ² 軟 ²		長 ⁵ 糖 ⁵
tsh/*ts ch/*tʃ ^h j/*ʒ s/*s	怎 ² 線 ³	全 ⁵ 算 ³		床 ⁵ 損 ²
k/*k k'h/*k ^h g/*g gn/*ŋ h/*h	寒 ⁵ 看 ³ 歡 ¹	光 ¹ 勸 ³ 園 ⁵		園 ³ 園 ³
_/*∅	換 ⁷	黃 ⁵	唔 ⁷	

説明：怎【□ (an) ～：如何】。唔【不】。長【幾 (lwa) ～：多長】。園 (kū^{ng})
k'hū^{ng} の誤植である可能性が高い。

4. 結語

小論では『Lexilogus』に記される閩南語の表記法を分析し、その音韻体系を明らかにした。以下に共時的視点から音韻体系の特徴を指摘する。②と③は3.4から得られた知見である。

①破擦音声母は、無声無気音と無声無気音で調音部位が異なっており、前者が歯茎音 *ts, 後者が後部歯茎音 *tʃ^hであった。

②両唇鼻音声母 *m と有声両唇破裂音声母 *b は、最少対立を有しており、異音の関係に在るとは言えない。

【表5】 *m と *b の最少対立

非鼻音声母 b/*b	鼻音声母 m/*m
蠟 báng/*baŋ ²	芒 mang/*maŋ ¹
面 bīn/*bin ⁷	明 mīn/*mīn ⁵

Medhurst (1832) が表す音韻体系では、鼻音声母 *m, *n, *ŋ と調音部位を同じくする非鼻音声母 *b, *l, *g はそれぞれ異音の関係に在ったと考えられており、鼻音声母は鼻化母音の韻母と、非鼻音声母は非鼻化母音の韻母とそれぞれ結合する。Dyer (1838) が表す音韻体系についても、杜 (2011:94) はこの2組の声母は異音の関係に在ると述べている。しかし、その語彙集部分「A vocabulary of words and phrases &c」の6頁と46頁に記される「bin-bang」と「min-a-tshae」からは *bin : min の対（調類は共に陽平）の存在が確認されるため、少なくとも *b と *m は異音の関係にはなかった。この点について、本書は Dyer (1838) と同じ特徴を有していると言える。

③非円唇前舌中段母音を韻腹とする韻母について、*e : ɛ と *eʔ : ɛʔ の対は確認されたが、*ẽ : ẽ の対は確認されなかった。これは *ẽ を表す表記

が見られなかったことに因る。

小論では語彙を考察対象としなかったが、本書には表6のように Dyer (1838) と異なる語形が間々見られる。そして、Medhurst (1832) と異なる語形は更に多い。

【表 6】 Dyer (1838) と本書とで異なる語形の例

	男	あそこ	私たち
Dyer (1838)	ta po lāng /*ta ¹ po ¹ laŋ ⁵	hé tāou /*hi ² tau ⁷ hwut tāou /*hut ⁴ tau ⁷	gwán /*guan ²
本書	tsha po /*tsa ¹ po ¹	hid la /*hit ⁴ la ¹ hid ây ũy /*hit ⁴ e ⁵ ui ⁷	gwán /*guan ² gwán tshěah ây lāng /*guan ² tsiaʔ ⁴ e ⁵ laŋ ⁵

これらは本書の閩南語の基礎方言を特定する手掛かりであると同時に、本書の閩南語が実際に発話された言語音を書き取ったものであることの証左でもある。一步踏み込んで言えば、『増補彙音』のような閩南語韻書からの干渉を免れていることの傍証とも見なせよう。語彙形式の分析、及び同時期の資料との比較研究を次の課題としたい。

また、小論では一部分の声母と調類について、まとまった数の誤植が存在することも明らかにした。その中には、ch と tsh のように、Medhurst (1832) の表記法と Dyer (1838) の表記法とが混在したものが含まれていた。序文で Dyer (1838) の表記法に基づいたと記しているにも拘わらず、表記法の混在が全体に及んでいることは、表音に関して、本書の文例が2つの相異なる源を有していることを想像させる。版下作成の過程で、レッグが閩南語の学習に用いた原稿（それはメドハーストの表記法で記されていた）に、後からアビールが用いた原稿（ダイアの表記法で記された）が混入した可能性はなかるうか。閩南語の表音には、『Lexilogus』という書物の成立過程を解き明かす上でも重要な情報が潜んでいるように思われるのである。

- 1 記される閩南語音とそれから帰納された音価を小論で併記する場合、スラッシュ (/) の前に本資料の表音、後に筆者による推定音価を記す。なお、* は本来比較言語学に於いて、特に再建された推定音価であることを表すのに用いられる記号であるが、小論ではこれを文献に記された情報から推定した音価を表示するために借用する。
- 2 小論では閩南語の音節に関して、声母や韻母といった中国語学の用語を用いる。
- 3 閩語研究の文献目録である張（2004:61）に本書の名が見えるが、書名から本書に閩南語が記されていることを察したものに過ぎず、本書の言語・文字を調査した上で掲げたものではなからう。
- 4 閩南語と台湾語の関係、そして「台湾語」という呼称の概念については、吉川（2013b:34）を参照されたい。
- 5 基礎方言の特定は機会を改めて行うが、吉川（2013a）では漢字音を手がかりに絞り込みを行い、漳州地区の一方言であるとの仮説を立てた。
- 6 小論で本書の閩南語を漢字表記する場合、全ての字形は筆者が当てたものである。本字の同定が困難な音節については□で記すか、もしくは訓読字を用いて記した。訓読字であることは___で表した。
- 7 “The orthography adopted will be found to correspond nearly with that employed in Mr. Dyer's Vocabulary of the Hok-keen Dialect.”
- 8 “the author has therefore adopted that mode of spelling which appeared to him the best, following, in most instances, the orthography of Dr. Morrison, in his Dictionary of the Mandarin tongue, where the sounds at all resembled each other; [...]”
- 9 “Cheng conveys the initial sound of *ch* as in *cheap*.”, “Ch’hut gives the initial *ch’h*, which is the *ch* strongly aspirated, to be pronounced with a whizzing noise between the *ch* and the vowel.”
- 10 “The distinction between the sounds written with the initials *c’h* and *tsh* requires particular notice. The former indicates the hard *ch* in the word *church*; but is even still more strongly aspirated, and so it is written with the *spiritus asper*; the latter indicates the soft sound of *tsh* as heard in the word *nutshell*, and must by no means be aspirated.”
- 11 杜（2011:94）は無声有気音の推定音価を *ts’* (*tsʰ* と等価) とするが、その根拠は何ら述べられていない。これも現代語の音価に無批判に従ったものであろう。

- 12 “He particularly regrets the wrong orthography of Chid-ây instead of Tshid-ây, which extends through nearly a third part of the volume, also of tshâyh for châyh, and böëyh for böëyh.”
- 13 なお、Dyer (1838) でも混乱は皆無ではなかったようで、「sê-châyh, a season」に誤植が認められる (A treatise on the tones of the Hok-keen dialect 17 頁)。この châyh の漢字は「節」であるため、声母は無気音である可能性が高く、tsh が相応しい。
- 14 更に 1 例が tshîn で現れる。
- 15 tshâyh (1 例) を含む。
- 16 “Jip gives the sound of *j* very much softened, as the *j* in French, or like the sound of *s*, in the English words *pleasure*, *precision*, *crosier*, &c.”
- 17 “Kay; the *a* in this word is like the sound of *a* in *care*, or like the *ea* in *bear*, *wear*, &c.”
- 18 “Key is a peculiar sound, sometimes a little drawled out as *Ke-ay*, but generally pronounced short as the French *e*, or as the *ey* in *déy*, or *bey*, when these words are applied to the governors of Algiers and Tunis.”
- 19 Dyer (1838 :Introduction 5 頁) では ay を er' に改定すると記されているが、実際には er' は用いられておらず、ey' が用いられている。
- 20 “Keng rhymes with *leng* in *lengthen*, and is sometimes a little drawled out, so as to appear to sound like *ke-eng*, though still but one syllable.”
- 21 不思議なことに、杜 (2011:91) は Dyer (1838) の eng に対しては異なる音価 [in] を与えている。こちらは漳州方言の現代音に無批判に従ったものであろう。これでは (表記法の改定を経ていない) 同一の表記 eng が、異なる方言で異なる音価を表すために用いられたことになってしまう。このような音価推定は、文献に記された欧文から過去の音価を推定するという方法の根幹を損ねるものである。実際に、Medhurst (1832) にも Dyer (1838) にも eng が話者によって異なる発音になるなどとは全く記されていない。
- 22 “Koe rhymes with our English words *toe*, and *hoe*, but differs from them in being pronounced with a full mouth, as if written *ko-oo*.”
- 23 “Kwuy is like *qui*, in the English word *quiet*, or sometimes pronounced a little longer, as if written *Koo-uy*, though still but one syllable.”
- 24 “Kwun is pronounced something like *Koo-un*, enunciated as one syllable.”
- 25 “Këem contains a double vowel, and is pronounced as if written *ke-yem*, or according

- to some *ke-yǎm*; an idea may be formed of this sound by taking the word *key*, and *'em*, the contraction of *them*, and pronouncing them rapidly together, thus *key-'em*.”
- 26 “Këung is a sound that rhymes with *young*, but is by some persons written *këong*, and made to rhyme with *song*.”
- 27 h の欠落に因る誤植も絡んだ böëy (2 例) と補助記号の取り違いによる誤植も絡んだ böëyh (1 例) を含む。
- 28 本書に記される粵語音についても補助記号の付加による誤植が少なかったことは、吉川 (2011:395-396) で述べられている。
- 29 tǒk (7 例) と補助記号の取り違いに因る誤植である tòk (2 例) を含む。
- 30 tshid (3 例) を含む。

参考文献

- 杜晓萍. 2011. 「十九世纪外国传教士所撰福建闽南方言文献语音和词汇系统研究」. 福建師範大學博士論文.
- 洪惟仁 (編著). 1993. 『福建方言字典』. 台北: 武陵出版社.
- 吉川雅之. 2013a. 「有關十九世紀前期的一個閩南語方言」, 『國際中國語言學學會第 21 屆年會大會手冊』, 328.
- 張嘉星 (編). 2004. 『閩方言研究專題文獻輯目索引 (1403 ~ 2003)』. 北京: 社会科学文献出版社.
- 張屏生. 2009. 「赫萊斯、佛蘭根《廈荷大辭典》音系及其相關問題」, 『文與哲』 14: 343-390.
- Douglas, Carstairs. 1873. *Chinese-English dictionary of the vernacular or spoken language of Amoy, with the principal variations of the Chang-chew and Chin-chew dialects*. London: Trübner.
- Dyer, Samuel 1838. *A vocabulary of the Hok-Këen dialect as spoken in the county of Tshëang-Tshew*. [Malacca]: Anglo-Chinese College Press.
- Griffis, William Elliot. 1902. *A maker of the new Orient: Samuel Robbins Brown: Pioneer educator in China, America, and Japan: The story of his life and work*. New York: Fleming H. Revell.
- Jones, Charles. 2006. *English pronunciation in the eighteenth and nineteenth centuries*. Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan.
- Medhurst, Walter Henry. 1832. *A dictionary of the Hok-këen dialect of the Chinese*

language. Macao: East India Company's Press.

Schlegel, Gustaaf. 1886-90. *Nederlandsch-Chineesch woordenboek met de transcriptie der Chineesche karakters in het Tsiang-tsiu dialekt* 荷華文語類參. Leiden: E.J. Brill.

Williamson, G. R. 1848. *Memoir of the Rev. David Abeel, D.D., late missionary to China*. New York: Robert Carter.

Wylie, Alexander. 1867. *Memorials of protestant missionaries to the Chinese: Giving a list of their publications, and obituary notices of the deceased*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

村上嘉英. 1968. 「白話字の変遷と閩南語訳聖書——プロテスタント文書伝道についての覚書」, 『やまと文化』 48: 96-118.

吉川雅之. 2011. 「レッグ編 *Lexilogus* に記される粵語音の表記と体系」, 『東洋文化研究所紀要』 160: 379-411.

吉川雅之. 2013b. 「ウェブサイトにおける音声言語の書記——香港粵語と台湾閩南語の比較」, 『ことばと社会』 15: 12-40.

The Romanized Transcription of Southern Min in James Legge's *Lexilogus* and Its Phonological System

YOSHIKAWA Masayuki

A lexilogus of the English, Malay, and Chinese languages: comprehending the vernacular idioms of the last in the Hok-keen and Canton dialects was compiled by James Legge (1815–1897) of the London Missionary Society in Malacca. He later became one of the most famous Sinologists of the nineteenth century. This work, a collection of model sentences in English, Malay, written Chinese, Southern Min, and Cantonese, was printed at the Anglo-Chinese College Press in 1841. The existing literature has paid scant attention to this historical text, even though *Lexilogus* provides an accurate picture of Southern Min 閩南語, which is called “Hok-keen” in this book and was spoken in the early nineteenth century. In this paper, we examine the Romanized transcription of Southern Min pronunciation in *Lexilogus* and analyze its phonological system from a synchronic perspective with respect to initials and rhymes.

A dictionary of the Hok-këèn dialect of the Chinese language, which was compiled by Walter Henry Medhurst, was the first Southern Min dictionary of the nineteenth century. *A vocabulary of the Hok-Këèn dialect as spoken in the county of Tshěang-Tshew*, which was compiled by Samuel Dyer few years after Medhurst’s dictionary, adopted Medhurst’s orthography, with some revisions. Although *Lexilogus* essentially adopted the orthography used in Medhurst’s dictionary, the two do not exactly correspond. For some initials and rhymes, it adopted Dyer’s revised system. However, *Lexilogus* does not completely correspond to Dyer’s system as well. Therefore, the mixture of these two orthographies in *Lexilogus* can lead us to thinking that the book’s sentences originate from two sources.